

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13416

研究課題名（和文）J. S. ミルと改革の政治思想：哲学的急進派のデモクラシー論をめぐって

研究課題名（英文）J. S. Mill's Political Thought on Reform: Philosophical Radicals on Democracy

研究代表者

村田 陽（Murata, Minami）

京都大学・白眉センター・特定助教

研究者番号：30823299

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀ブリテンにおける哲学的急進派のデモクラシー論の知的コンテクストの再検討を通じて、J. S. ミルの改革の政治思想を分析した。ミルの政治思想が現実の改革という実践的目的に深く関連していたことを示すために、1832年の第一次選挙法改正から1867年の第二次選挙法改正までを主な分析時期に設定し、当時の保守、リベラル、哲学的急進派という政治的対立軸のなかで、彼の思想的特徴を分析した。その結果、ミルの改革論には、他の哲学的急進派のベンサム、J. ミル、G. グロートの支持した議会改革案との違いが明確にみられ、その一要因が時代の変化のなかで形成された彼独自の自由民主主義構想にあることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、一人の思想家（J. S. ミル）を主題としながらも、彼を取り巻く言説空間の解明を同時に試みた。その結果、ミルのみならず、彼の属した哲学的急進派や彼らの論敵との比較を行うことで、19世紀初頭から後半にかけてのブリテンの議会政治の一側面がミルの政治思想から析出された。ここに、一定の学術的意義が確認され得る。さらに、ミルは選挙制度など政治・社会の様々な改革を支持したが、そのいくつかは現代の日本や諸外国の民主主義を支える基礎を構成しており、民主的な政治の健全な運用に必要な諸要素について、歴史的に理解するための手がかりを提供する意義があったと捉えられる。

研究成果の概要（英文）：This research project examined J. S. Mill's political thought on reform by considering the intellectual context of democratic theories argued by the philosophical radicals in nineteenth-century Britain. To identify that his ideas were deeply connected to the practical aim of reforming society, the main period of analysis was set from the First Reform Act of 1832 to the Second Reform Act of 1867. His thought was characterised by the political controversy among the conservatives, the liberals and the radicals. The results indicated that what Mill argued differed from the parliamentary reform proposals delivered by his fellows, namely Bentham, J. Mill and G. Grote. One of the distinct elements was his vision of liberal democracy, shaped in response to the prevailing times.

研究分野：西洋政治思想史

キーワード：J. S. ミル デモクラシー 代議制民主主義 政治改革 哲学的急進派

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 研究の問いとその背景

本研究のテーマである 19 世紀イギリスの思想家 J. S. ミル (1806-1873) は、政治学の古典『自由論』(1859 年) や『代議制統治論』(1861 年) の著者として知られる。また彼は、ベンサム功利主義理論を批判的に継承し、それを修正することで、個人の個性や「徳」を重視した独自の功利主義を展開したことで著名である。以上の理解は、現在までの国内外の先行研究により度々示されてきた。ただし、これまでの研究において一つの学術的課題として残されてきた問いは、ミルの政治思想には、対立関係にあるとみなされる思想・理論が混在していることである。

例えばミルは、諸個人の自由を擁護する一方、善き代議制デモクラシーには優れた市民による政治参加が肝要であると捉えた。彼の功利主義理論は、幸福の総計のみならずその質をも重視するため、ベンサム的な「最大多数の最大幸福」から逸脱するとも指摘される。人々の幸福に大きな差異はないと捉え、より平等な民主的政治を望んだベンサムに対し、ミルの代議制論には、適切な教育を受けた有徳な市民による統治を支持する特徴がみられ、この部分に共和主義思想を位置づける解釈もある。つまり、ミルの政治思想には、自由主義、功利主義、共和主義といった原理的には相反するとも解され得る三つの理論的特徴が混在している。ミルの多面性は、戦後以降の一部の先行研究において「理論的整合性を欠いた思想」と批判されることもある。

本研究は、以上のミル研究の現状に対して、ミルと彼自身を取り巻く哲学的急進派 (philosophical radicals) の政治改革論に歴史的にアプローチすることで、ミルの理論的一貫性の問いに取り組むものである。

### (2) 本研究の着想に至った経緯

研究代表者は、本課題を構想する過程で、三つの理論的特徴(自由主義、功利主義、共和主義)の歴史的背景に着目する重要性を認識した。つまり、これらの理論上の対立とは、古代に源流を有する共和主義と、近代に根本的な起源があると解釈される自由主義と功利主義というミルの政治思想に内在化した「古代的なもの」と「近代的なもの」の間にみられるのではないかと想定した。とりわけこの要因には、彼の古典古代論受容があった可能性に注目した。

具体的に述べると、ミルは、哲学的急進派の政治家で歴史家のジョージ・グロート (1794-1871) の著作・思想を通じて、古典古代 (特に古代ギリシア) の歴史・哲学に関する洞察を深め、この洞察の一部はミルの『自由論』や『代議制統治論』におけるデモクラシー論に影響を与えたと研究代表者は分析した。つまり、先行研究が指摘する理論的首尾一貫性の不在とは、市民の徳や教育を重視するギリシア的な共和主義への「傾倒」が一要因であるともいえる。しかし、ミルとグロートを含む哲学的急進派と彼らの論敵との比較、さらに、なぜ 19 世紀ブリテンにおいてギリシアを論じることが政治改革やデモクラシーを論じることにつながるのか、といった同時代人との比較や歴史的コンテクストの分析には発展可能性が大いに残されていた。

### (3) 関連する先行研究と本研究の関係

本研究課題に関連する先行研究には、代表的なものとして Nadia Urbinati, *Mill on Democracy: From the Athenian Polis to Representative Government*, The University of Chicago Press, 2002 がある。彼女の研究は、J. G. A. ポーコック『マキアヴェリアン・モーメント』以降、国内外で興隆した共和主義思想史研究の理論的着眼点を大いに活用しており、ミル研究に共和主義的解釈を与える重要な契機を提供したが、歴史的コンテクストの分析においていくつかの課題も残されていた。

哲学的急進派の思想史研究は、個別的な思想家ごとの研究に進展がみられる(例えば、Phillip Schofield, *Utility and Democracy: The Political Thought of Jeremy Bentham*, Oxford University Press, 2006 や Kyriakos N. Demetriou (ed.), *Bill 's Companion to George Grote and the Classical Tradition*, Brill, 2014)。本研究は、これらの研究の成果を活かしつつも、哲学的急進派というより包括的な視点から、19 世紀ブリテンの政治改革論とそれに密接に関連したギリシア論を歴史的に考察するものである。以上の先行研究群を総合的に俯瞰しつつも、ミルの思想を政治改革の展開として再検討することが、本研究の位置づけである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、J. S. ミルが生涯を通じて取り組んだ「改革の政治思想」を明らかにすることである。彼の政治思想は、デモクラシーの是非を問う様々な論争に対する「応答」として形成されてきた側面があると仮定し、本研究では、現実政治の改革という実践的目的に基礎付けられたミルのデモクラシー論の形成過程とその結実を分析する。

加えて、ミルを含む当時の功利主義者によって構成された哲学的急進派を取り上げる。ジェレミー・ベンサム(1748-1832)の思想を中核とした哲学的急進派は、人文学・社会科学の広範なテーマを研究し、同時に様々な改革論を展開した。彼らの改革構想の多くは、当時の保守(トーリー)やリベラル(ウィッグ)とは異なる政治的立場を示した。よって、哲学的急進派の知的文脈のなかでミルの政治思想分析を行うことを通じて、19 世紀ブリテンの政治対立の諸相を示すことが、本研究の包括的な目的である。

## 3. 研究の方法

### (1) 分析時期及び対象

ミルの政治思想に関しては、1832 年の第一次選挙法改正から 1867 年の第二次選挙法改正を主たる分析時期とする。哲学的急進派は、1832 年の改正案へ向けた知的・実践的活動を行ったが、およそこの時期からミルはベンサムの改革論に対する論考を発表している。1867 年は、ミルが主要著作の刊行後に庶民院議員として国政に携わった時期であり、彼の政治思想の「結実期」として 1860 年代後半までを検討する。

ミル以外の哲学的急進派として、ミルと実際の知的関係を結び、彼との応答が明確に確認されるジェレミー・ベンサム、ジェームズ・ミル、ジョージ・グロートを対象にする。さらに、改革論の知的文脈を構成する彼らの論敵(保守やリベラル)の言説にも目を向け、なぜ哲学的急進派にとって民主的改革が喫緊の課題であったかのを示す。

### (2) 分析方法

本研究の方法は史資料の文献研究に基づく。主な分析対象となる一次文献は、J. S. ミルの『著作集』(トロント大学出版)に加えて、ベンサム、ジェームズ・ミル、グロートによる政治改革論や代議制デモクラシーに関わる刊行物を扱う。哲学的急進派の草稿については、グロート草稿(British Library 所蔵)を中心に調査・分析を行う。ただし、本研究課題の開始年度(2020 年度)は、新型コロナウイルスの世界的拡大により、海外での資料調査に延期が生じたため、草稿の収集と分析には遅れがみられた。

## 4. 研究成果

本研究課題の遂行を通じて、ミルの改革の政治思想に関する 4 つの時期的区分に基づく分析、哲学的急進派とミルの政治改革論の比較検討を行った。

で示した4つの時期区分とは、1832年～40年：改革思想の形成、1841年～1850年：改革思想の深化、1851年～1861年：改革思想の結実、1862～1867年：改革思想の実践を意味する。それぞれの時期を扱った研究成果報告は、European Society for the History of Political Thought(2022年度 新型コロナウイルスの影響により2020年度を予定していたが2年延期された国際学会)と日本イギリス哲学会(2022年度)にて行い、ミル研究者や政治思想・政治哲学研究者、さらにイギリス哲学・思想研究者からの幅広いフィードバックを得ることができた。

では、ミルを一定の主題としつつも、哲学的急進派や彼らの論敵との比較を含む研究成果公表を政治思想学会(2022年度)、International Society for Utilitarian Studies(2023年度)、日本イギリス哲学会関西西部会(2023年度)等にて実施し、その一部の内容は論文として公表した(村田陽「ギリシアへの陶醉」『政治思想研究』2023年)。本論考では、J. S. ミルとグローートのギリシア史受容を保守(トーリー)の政治家で歴史家のウィリアム・ミトフォードによる『ギリシア史』と比較し、ミルとグローートが保守による混合政体論を乗り越えるために、単一民主政を発明したギリシアのアテナイを擁護したことを検証した。加えて同論文では、J. S. ミルとグローートのギリシア史解釈の比較、そしてJ. S. ミルの独自性を「国制の道德」の概念から分析した。

以上の成果報告の機会を通じて、ミル研究の視点をふまえた哲学的急進派 とりわけベンサムやジェイムズ・ミルといったミルの一世代前に該当するとされる思想家たち へのアプローチの重要性が強調された。ベンサムが提示した議会改革の構想や具体的な制度設計案が、次世代のJ. S. ミルにいかに関承されたのかについては、先行研究でも度々分析されてきた一方、ミルの父親ジェイムズ・ミルやミルの同胞グローートを加えた4名の比較によって、哲学的急進派の民主的改革論の細部には差異があることが認められた。思想家ごとの研究進展が必要であることはいうまでもないが、個別研究の成果をふまえつつも、一つの知的集団 哲学的急進派 の思想的・哲学的変遷を歴史的に再構成することの意義を把握することができた。

本研究課題の採択期間とその後において、研究代表者は、本研究プロジェクトの成果の全体的な取りまとめを見据えて、以上 と を交差的かつ複合的に扱った研究書(単著)の出版へ向けた作業を進めている。本研究課題で設定した問いをさらに発展的に研究すべく、J. S. ミルと彼の知的背景を構成する言説空間の解明を今後も継続して行いたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 村田陽	4. 巻 23
2. 論文標題 ギリシアへの陶醉—ジョージ・グロートとジョン・スチュアート・ミルのアテナイの民主政論	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 政治思想研究	6. 最初と最後の頁 236-267
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村田陽	4. 巻 44
2. 論文標題 フィリップ・スコフィールド『功利とデモクラシー—ジェレミー・ベンサム政治思想』(書評)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 イギリス哲学研究	6. 最初と最後の頁 50-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村田陽	4. 巻 46
2. 論文標題 Callum Barrell, History and Historiography in Classical Utilitarianism, 1800-1865 (書評)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 イギリス哲学研究	6. 最初と最後の頁 61-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村田陽	4. 巻 47
2. 論文標題 ジョージ・グロートとジョン・スチュアート・ミルによるデマゴグ解釈：ギリシア史受容における弁論術の再評価（部会報告）	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 イギリス哲学研究	6. 最初と最後の頁 175-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村田陽	4. 巻 47
2. 論文標題 第3報告 政治思想・政治思想史の観点から（大会シンポジウム報告）	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 イギリス哲学研究	6. 最初と最後の頁 156-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村田陽、戒能通弘	4. 巻 47
2. 論文標題 第16回国際功利主義学会（Luiss Guido Carli, Rome, 5-7 July 2023）（国際学会報告）	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 イギリス哲学研究	6. 最初と最後の頁 129-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 村田陽
2. 発表標題 哲学的急進派とアテナイの民主政――19世紀ブリテンの「古代―近代論争」を手がかりに
3. 学会等名 第29回（2022年度）政治思想学会研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Minami Murata
2. 発表標題 John Stuart Mill and Ancient Athens: General Interest or Common Good?
3. 学会等名 Sixth Biannual Conference: The European Society for the History of Political Thought（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 村田陽
2. 発表標題 政治思想・政治思想史の観点から（シンポジウムII：J. S. ミル研究の現状と意義―没後150周年記念）
3. 学会等名 日本イギリス哲学会第47回総会・研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Minami Murata
2. 発表標題 Directness in Representative Government: John Stuart Mill and Other Utilitarians on Athenian Democracy
3. 学会等名 16th Conference of the International Society for Utilitarian Studies（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 村田陽
2. 発表標題 ジョージ・グロートとジョン・スチュアート・ミルによるデマゴグ解釈―ギリシア史受容における弁論術の再評価
3. 学会等名 日本イギリス哲学会関西西部会第69回研究例会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------